

韓国の大衆音楽産業で働く人々のライフヒストリー ——K-POP ブーム前に「韓日プロジェクト」で日本に渡った韓国人ギタリスト青年——

澁谷 知美

I. 研究の目的

本稿は、韓国と日本の放送局の共同プロジェクトのもと、2008年より1年半、日本で活動した韓国人ギタリスト青年のライフヒストリーである。聞き取り調査は、韓国の音楽産業に携わる人々のライフヒストリーを記録する研究活動の一環として行われた。論文の「問い」がまだ精緻化されていないため、今回は研究ノートとして、分析を加えることなくほぼそのままインタビューを掲載する。

問いは精緻化されていないものの、問題関心としては次の二点が挙げられる。第一に、アメリカの政治学者、ジョセフ・ナイのいう国家の「ソフト・パワー」を支えるものを、韓国の大衆音楽産業で働く個人の経験の水準から把握するとすればどうなるか、ということである。ソフト・パワーとは、次のように定義される。「好ましい結果を得るべく行われるアジェンダ設定・説得・肯定的な反応の導出という同化的な手段をつうじ、他者に影響を与える能力」(Nye 2011, pp.20-1)。具体的には「文化、価値観、外交政策」が挙げられる(Nye 2004, p.11)。そして、ここでいう「文化」には、音楽やアニメなどの大衆文化も含まれる。軍事力や経済力は「ハード・パワー」と呼ばれ、ソフト・パワーの対概念である。

K-POPは韓国大衆音楽のなかでも、とくにアイドル音楽のことを意味する。K-POPは、2011年ごろから世界での認知度を高め、韓国におけるソフト・パワーの一角を担っている。例えば、2011年6月には、韓国を代表する芸能事務所であるSMエンターテインメントが、東方神起やSuper Junior、少女時代などが出演するコンサートをパリで開催し、2日間で1万2千人を動員したと報じられた。また、同年9月、同じ公演が東京で15万人を動員し、10月には、高名なアーティストが公演することで有名なニューヨークのマジソン・スクウェア・ガーデンで1万5千人を動員したとされる。

こうしたK-POPアイドルの海外公演を報じる新聞や雑誌には、「世界に影響力を及ぼす韓国」の姿が紋切り型のように描かれる。公演に熱狂する現地のファンの写真が配置され、

K-POP アイドルたちはよき「外交官」であり、韓国の国家イメージの向上に貢献するであろうことが記される。国家イメージの向上は、韓国の家電製品などの国外での販売量増加につながり、経済的な面でも利点があることが予測される。つまり、新聞や雑誌の報道だけを見ていると、K-POP はあたかも韓国の「国益」を向上させるための手段であるかのような扱いであり、「ソフト・パワー」の名にふさわしい役割を期待されている。

一方、韓国の大衆音楽の現場にいる個々人が、「国益」を意識しながら働いているかといえば、そういうことはないだろう。音楽が好きだからとか、この業界に関心があって等、きわめて個人的な理由にもとづいて働いていると予想される。とある個人が音楽業界で働くことと、「国益」との間に関係がないことが明らかになれば、韓国という国家に寄与する「ソフト・パワー」が、かならずしも国家を意識しない個人によって下支えされている側面が見えてくるだろう。今回のインタビュー調査は、この点を明らかにするための下準備として位置づけられる。

国家レベルでの「国益」追求が、「国益」とは無関係に動く個人によって遂行されようとしている様で思い出されるのは、日本の明治期の立身出世をめざす青年を追った教育社会史研究である。キンモンズによれば、明治維新を担った人びとは、自分を独立した個人ではなく国家の財産と考えていた。個人が強調されたことはあったが、それは国家のためであった。一方、明治末の青年は自分のことのみ、自分の私的利益のみを考えるようになった。だが、彼らは、そのことをストレートには表現せず、個人の立身出世と国家の繁栄とを結びつけて論じる場合があった (Kinmonth 1981 → 1995, pp.299-300)。

本当は私的利益を追求しているのに、国家利益を追求しているフリをする日本の明治末の青年のあり方が、現代韓国の音楽人に当てはまると主張したいわけではない。そうではなく、とある業界に「国益」追求の気運があるからといって、業界で働いている個人が「国益」を追求しているわけではない、という視点を教育社会史から借用したい。求めているものが「国益」でないとなれば、現代韓国の音楽人たちは何を追求しているのだろうか。そして、音楽と「国益」を結びつけるマスメディアの風潮をどのように受け取っているのだろうか。こうした問いが浮かび上がってくる。

インタビュー調査の第二の目的は、K-POP ブームの歴史を、個人の経験の水準から記録することである。新聞や雑誌記事、各種音源や動画を集めれば、K-POP の表だった動きについての年表は容易に作成できる。しかし、ブーム以前の韓国大衆音楽業界ではどのような目に見えない動きがあったのか、ブーム到来以後、人びとは何を考えながら活動していたのか、といったことは、個々人にインタビューしてみなければ分からない。新聞や雑誌記事などでは明らかにならない K-POP の歴史を描くことが、この調査の目的の一つである。

II. インタビュー対象者のプロフィールと位置づけ

次に、インタビュー어의プロフィールを示す。また、一連のインタビュー調査における氏の位置づけについて言及しておく。

対象者のイ・ヒョンス (Hyun-soo Lee, 仮名) 氏は、1987年生まれの男性で、韓国人のギタリストである。17歳の時に、韓国の芸能事務所に練習生として所属し、アイドル・バンドとしてメジャーデビューすることが決まっていたが、事務所の音楽の趣向と自分のそれが違ったため、事務所を辞めた (なお、そのアイドル・バンドはK-POPブームにのって成功をおさめ、国内外に多くのファンを擁している)。2008年に、韓国の音楽専門放送局 (以下X社) が企画した「韓日プロジェクト」を契機に日本へ。日本の代表的な地上波民間放送局 (以下Z社) の専属ミュージシャンとなり、各アーティストのバック・バンドとして演奏した。1年半の日本での活動後、兵役義務のために韓国に帰国。現在は楽器店で働きながら、ソウル市内にある2年制の音楽大学で勉強している。

インタビューは日本語と韓国語で、2012年12月にソウル市内のカフェで行われた。ヒョンス氏は日本語が堪能である。来日前はまったく日本語が分からなかったが、日本で仕事をするうちに、半年ほどで話せるようになったという。

一連のインタビュー調査において、氏はどのような位置づけにあるのだろうか。第一に、音楽業界に携わる人びとのうち、「演者」としての経験をつうじて、本稿の問題関心に応えてくれる存在だということである。ヒョンス氏自身は有名なK-POPスターではないものの、十分なギター演奏技術を韓国の音楽専門放送局に買われ、日本に派遣された。その意味で、アーティストの立場から韓国の「ソフト・パワー」を下支えした人物とみなされうる。

第二に、ヒョンス氏のインタビューは、K-POPブーム前の、韓国と日本の音楽業界における「文化交流」の一面を明らかにしてくれるものだということだ。ヒョンス氏が来日した2008年は、ドラマ『冬のソナタ』のブームも下火になり、かといってまだK-POPブームは来ていない「狭間」の年である。放送局で「韓日プロジェクト」が用意される程度には機は熟していたが、日韓の音楽的な交通が十分ではなかった時期に、韓国人ミュージシャンが日本でした経験はどのようなものだったのか。ヒョンス氏のライフヒストリーはその点を明らかにしてくれるだろう。なお、以下の()内は筆者による補足である。

Ⅲ. インタビュー

Ⅲ-1 音楽の世界へ

——どのようなきっかけで音楽を始めたのですか。

Hyun-soo: 中学校の時、友人たちと教会で音楽をしていました。教会に所属している音楽隊みたいなものです。礼拝が終わった後に、教会の先生や先輩たちから音楽を習いました。幼いころから教会に通って、いつのまにか習うことになりました。幼稚園の時から、趣味でピアノを弾いていたんですけど。両親が無理に通わせていました。

——音楽が好きなご家庭だったんですか。

Hyun-soo: いいえ。韓国人は、小さいころ、みな一度はピアノやそのほかの楽器を習います。両親が子供たちに一度は習わせるんです。習わせて才能があれば続けさせて、なければ、違ったことをさせてみます。僕のピアノの場合、軽い趣味にすることができる程度でした。本格的にギターをするようになったのは中3の時です。

外国にいる Steve Vai とか、Joe Satriani, John Petrucci といった沢山のギタリストの映像を見て、自分もしてみたいと思うようになりました。みな、世界的に有名なギタリストです。

彼らに憧れつつも、本格的にギターをしようと思い立った契機は X-Japan です。当時、韓国では X-Japan が流行していました。彼らをきっかけに、日本の音楽をたくさん探して、聞くことになりました。聞いてみて、「ああ、このぐらいのレベルなら、自分もある程度はできるかもしれない」と思いましたね。当時、日本のポップミュージックも、その他の国の音楽もたくさん聞きました。そして、エレキギターを演奏してみたいと思うようになりました。

——韓国では、音楽をしたい人は音楽大学に行くケースが多いですね。

Hyun-soo: 行かなければならない、ということはないです。僕が小さかった頃は、音楽をしたい人は、中学校や高校を卒業してすぐに音楽を仕事にし、市場を作りました。でも、今は音楽大学ができて、まず大学を目標にするようになりましたね。芸能人をたくさん輩出しているソウル芸術大学校という所があります。そこから芸能人がたくさん出てくるようになり、若者たちは芸大に行かなくては、と考えるようになりました。(僕が小さい頃にそうした流れがあれば) 僕もどこの大学へ行けばいいかな、と考えていたかもしれません。僕らよりも上の世代は、ほとんど中学、高校を卒業して音楽の仕事を始めた人たちです。現在、現場に出ている人々は、ほとんど大卒です。今は、ミュージシャンも大学を出なければなりません。ただ、ボーカルの場合は、まずは芸能事務所に入るべく努力して、それがダメだった

場合に、大学進学を考えるみたいです。

Ⅲ-2 日本への渡航

——ヒョンスさんが韓日プロジェクトに参加するようになったきっかけは？

Hyun-soo: 韓国にX社という音楽専門ケーブル放送局があります。そちらの音楽番組のスタッフとして、舞台装置を設置するなどの裏方の仕事をしていました。18歳の時です。そのプロデューサーから「オーディションがあるから、一度出てみないか」と誘われました。韓日合作ドラマが流行ったので、音楽の分野でもそうしたプロジェクトを一度してみようという話が会社のほうから出たみたいです。それで、オーディション番組があるから、一度オーディションを受けてみるかと言われて、それをきっかけに行くことになったんです。

——2008年に日本に行きましたね。

Hyun-soo: X社の韓日プロジェクトで行きました。僕が行く前にも、すでに何度かプロジェクトがあったようです。しかし、うまくいっていなかったみたいです。僕の役割は、日本の地上波放送局、Z社専属のミュージシャンです。歌手が歌を歌ったり、ステージで公演をする時、後で演奏している人々がいますよね。その役割です。X社はZ社だけでなく色々な日本の会社と提携しようとして、話をもちかけたようですが、僕が行ったところは偶然Z社でした。

ELT (Every Little Thing) の後でも演奏しましたし、韓国の歌手のユンナの後でも演奏しました。その当時、『BLEACH』というアニメーションで有名になったんですけれど。あちこちに演奏しに行きました。でも、あんまり覚えていなくて。当時は日本語も全く分かりませんでしたし。言葉が分からないから、どんな仕事で、誰が誰で、そんな話も全く理解できなかったんです。ほかの人の動きを見ながら、仕事をしていました。誰かが舞台上で物を持って持ち、演奏すればして。

そして練習もしました。楽譜などというものは殆どありませんでした。だから、曲を聴いて耳で覚えます。いつも演奏する曲の音源をもらえるのは前日です。だから、その日の夜に聴いて練習して、翌日が本番です。ただし、そんなに難しい曲はありませんでした。GLAYやDIR EN GREYや、Gacktといったアーティストであれば難しいですが、僕と一緒に仕事をした人びとの音楽はそうではありませんでした。

Z社の男性プロデューサーが変な人でした。まだ韓国を植民地のように考えている人で、年齢も上でした。50代後半ぐらい、あるいは60才ぐらいでないかと思います。退職直前だったから、「私は何をしても大丈夫だ、何か起こっても関係ない」と考えていたようでした。

ある日、スタジオで演奏する音楽を聴きながら、少し休憩していました。その時、プロデューサーが来て、「お前、ちょっと」。そう言うんです。音楽を消したところ、「お前、竹島はど

韓国の大衆音楽産業で働く人々のライフストーリー

この国の鳥なんだ？」と尋ねました。僕は何も答えませんでした。独島^{トクト}といえは、そこで（プロデューサーとの関係は）終わるから、独島とは言いたくありませんでした。

——そのような人物が、韓日プロジェクトの現場にすることが、私には許せないことです。

Hyun-soo: 当時の状況を考えてみると、そういうことがあっても当然だという雰囲気がありました。今はちょっと良くなったかも分かりませんが（筆者註。インタビューは2012年12月に行われた）、以前は本当に激しかったです。（韓国人は）まだ植民地の人間あつかいでした。日本で入国審査を受けた時も、審査官がとても疑わしい視線で僕を見ました。「君は、どんな目的で来たのか？」という感じで。「いったいなぜ韓国人のような者が、日本で仕事をするのか」といった雰囲気でした。

最近でこそ韓国も発展して、影響力が強くなったけれど、（日本人は）そのことを最近知るようになったでしょう？ 以前は本当に開発途上国の人間あつかいでした。

道を歩いている時も、中学生か高校生ぐらいの少年が、僕の後ろで「あいつは朝鮮人じゃないの？」と話しているのが聞こえたりもしました。服装で分かったのかな？ キムチの臭いがしたのかもしれませんが。

——職場で「弁当差別」があったと聞いたのですが。

Hyun-soo: その男性プロデューサーが担当した2ヶ月間の話なんですけど。他の人は全部同じ普通の弁当なのに、僕だけご飯と梅干しかなかったんですよ。けれど、他の職員の方がそれを知って、僕に気を遣ってくれました。僕にクレジットカードを渡して、「外に出て、これで食べてきなさい」と言ってくれました。コンビニや牛丼屋などで食べていました。

——韓国のX社の社員たちにその事実を話しませんでしたか？

Hyun-soo: いつの頃からか、X社のプロデューサーとは連絡が途切れていましたね。はじめは、2ヶ月ほど過ぎた時に、「元気でやっていますか？」という電話が韓国から来たのですが、でも、その後は3ヶ月に1度連絡が来て、最後は来なくなってしまいました。よくお世話になったX社のプロデューサーがいりしたのですが、その人がプロジェクトを辞めたあとは、電話が来なくなりました。多分その時、韓日プロジェクトが終わったのだらうと思います。

——思ったより、適当にプロジェクトが進行されていたんですね。

Hyun-soo: 韓国もそこまで日本に期待していなかったし、日本も韓国にたいしてそこまで「お世話をしてあげる」とは考えていなかったようです。日本の企業は、韓国の企業を差別はしません。ただ、支援できる部分だけ支援して、あとは何もしないんです。韓国のX社も僕に何もしませんでしたし。

韓国に戻ろうと何度も考えましたが、少なくとも2ヶ月は耐えてみようと思い直しました。半年が過ぎる頃には日本語も話せるようになって、仕事がますますおもしろくなっていきましたし。「ここ（日本）で生活してもいいな」と考え始めました。

仕事自体は楽しかったです。なぜなら、好きな音楽もしながらお金も稼ぐことができるからです。韓国では有名なプロが演奏しても、ギャランティが一度に50万ウォン程度。日本円で換算すれば4万円程度です。でも、日本では7万円ぐらいになりますね。僕のような有名でないアーティストでも2,3万円以上もらうことができます。韓国ならば4,5万ウォン(3200～4000円)ぐらいにしかならないけれど。

2ヶ月後、その男性プロデューサーが退職して、37才ぐらいの女性プロデューサーが来ました。そして、今まで何もしてあげられなくて申し訳ないと思ったのか、いろいろとお詫びをしてくれました。たとえば、スタジオで練習している時、たまにホテルの部屋を予約してくれて、いろいろと気を遣ってくれました。当時はスタジオで寝泊りしていたんです。自分の部屋を持つつもりはなかったです。

——よく耐えましたね。

Hyun-soo: 日本まで来て、何もせず韓国に戻れば、自身に負けたことになると思ったからです。当時、まだ20代はじめでした。今は体力的に無理です(笑い)。

——女性プロデューサーが着任したあと、状況が変わりますね。韓国人に特有な業務はありましたか？

Hyun-soo: 特に無かったです。日本人もする仕事をいっしょにしていました。でも、最初は荷物運びを担当することになりました。それは、新人だったからなのかもしれないのですが、3,4ヶ月ぐらいしたあとは、通常業務(音楽の演奏)だけしました。はじめに荷物運びをすることは予め聞いていたので、別に問題は感じなかったです。

女性プロデューサーが来たあとは、他の人と同じ弁当をもらえました。はじめは、韓日プロジェクトとして仕事をしていましたが、いつのまにかプロジェクトとは関係なく、Z社の仕事をすることになりました。「イベントをするので、舞台上で演奏してください」とか「イベントのために曲を作ってください」とか、そうした要請はありましたが、「韓国人として、これこれの仕事をしてください」という要請は無かったです。

——「韓日プロジェクト」といいながら、「韓国的な」部分は無かったようですね。「日本的な」部分だけがあつたように見えます。

Hyun-soo: Z社が「韓国から来たミュージシャンを紹介します」といった内容の番組を作ろうとして、その映像も撮影しましたが、番組の企画そのものが無くなってしまいました。当時はその男性プロデューサーがいて、その人が韓国をとっても嫌っていましたから。

僕よりも、僕と一緒に仕事をしている日本人により多くインタビューしていました。日本人が見た韓国人を描く内容でした。「彼はこういう人です」とか「彼はよく仕事をしますよ」とか、(日本人の仕事仲間が)話していました。

韓国に戻った後も軍隊に行く前までは、Z社の女性プロデューサーと連絡をとっていました。X社のプロデューサーや、芸能事務所の社長とも。でも、軍隊に行った後は、すべて

韓国の大衆音楽産業で働く人々のライフヒストリー

連絡が切れてしまいました。軍隊から帰ってきて、すべてのことをイチから再び始めなければならなくなってしまいました。

Ⅲ-3 兵役と大学

——韓国にはどうして戻ることになったのですか。

Hyun-soo: 両親から韓国に帰国しろと連絡が来て、戻ることになりました。それまでは両親と音信不通だったのですが、ある時、連絡が来ました。その時に、もう戻って来いと言われてきました。韓国人ですから、兵役の問題があるんです。兵役生活をしなければならなくなり、契約の途中だけれどX社の社長に話をして……。韓国の人々は軍隊があるせいで、音楽を続けるのが大変なのです。

軍隊に行く前に、音楽大学の入学試験をすぐに受けました。大学を選ばず、とにかく受験し、2年制の音楽大学に合格しました。入隊前に1学期の半ばまで学校に通い、それから軍隊に行きました。途中までしか通わなかったせいで、一学期の成績はオールFです。なので、さらにもう一学期通わなければなりません。

軍隊には2009年から2011年までいました。軍隊では音楽をすることはできません。演奏できるようにしてくれはするのですが、好きなだけ練習できるわけではないです。除隊後は、完全に演奏のスキルが鈍ってしまい、はじめて演奏する人と同じくらいギターを弾くことができませんでした。回復は早かったですが、その時は、初心者ほどの実力しかなかったです。

除隊後、1年休んでから音楽大学に行きました。なぜ休んだかという、ギターの練習が必要だったからです。大学で演奏をしなければならないのに、それだけの力がないんです。それで1年間、練習をして合格通知をもらっていた音楽大学に入りました。

大学で学んでいることは、ギターを弾くための基本的な方法ではなく、もう少し技術的なことです。反復練習も多いです。ポップミュージックやロックミュージックは演奏せず、するのはジャズやフュージョンジャズです。僕は本来、ロックをしていたのですが、大学に来てジャズを習ってみると、いろいろなロックの演奏をすることができます。ジャズの練習がロックの演奏に役立つんです。それでももうすこし習ってみたいと思っています。

授業自体には満足していますが、2年制の学校なので、4年制大学なら余裕をもって習えることを2年間で圧縮して学ばなければなりません。それだけ時間が短いです。とてもせわしなく動かなければならなくて……。その点がちょっと惜しいです。もう少しゆっくり学ぶことができれば、もう少し考えることもできると思うのですが、それができません。とにかく早く習って卒業しなければならない点は、あまり良くないと思います。

4年制の音楽大学もありますが、韓国にあるのはわずかです。韓国の音楽学校のほとんどが専門学校です。4年制はソウルではなく、^{キョンギド}京畿道にあります。それで、ソウルの外に4年

間通うよりは、ソウル圏内で活動するのがよいので、2年制の今の学校に通っています。一生懸命2年間を過ごせば、時間を稼ぐことができますから、その点には満足をしているんですが。

Ⅲ-4 楽器店での仕事

——現在はどうなお仕事をされていますか。

Hyun-soo: 大学に通いながら、楽器店の仕事をしています。市の支援を受けながら、音楽の無料公演を企画したり、一般市民に楽器演奏を教える仕事です。2ヶ月前から開始しました。

楽器店のあるホンデ地区には、音楽をする人が集まる「村」があります。しかし、ホンデで演奏できる場所は消滅しつつあって、音楽村のカラーも消えつつあります。それで、もう一度、音楽村のカラーを復活させてみようとして、市長が僕らの事業の支援をしてくれたのです。

市のお金ですから、責任は感じます。僕ら音楽をする人間は、(安定した)仕事がありません。ですから、こうした事業は音楽をする人間にたいして、食べていけるだけの仕事を創り出す役割をします。僕らは、ミュージシャンだからこそできることを探して、韓国ならではの音楽を作り上げる役割をしなければならないと思います。そこは意識をしています。

楽器店には公演会場があります。そこで、ホンデのインディーズ・バンドに無料で公演させてあげています。そして、近隣の住民たちにも無料で公開しています。

これを「才能寄付」といいます。才能を分けるという意味です。ミュージシャンの音楽的な才能を、一般の人びとにお分けするんです。海外でも同じかもしれませんが、韓国では、ポップやロックやジャズやクラシックの生の公演に、一般の人々が触れる機会は多くはありません。なので、私たちの事業をつうじて、人びとに音楽の多様性を知ってほしいのです。それで人々の耳(音楽にたいするセンス)を高めるんです。高めれば、子供たちがそれを見て育つでしょう。そうすれば、韓国全体の音楽的な水準が高まります。なによりも、公演の公開が一番重要な事業です。

はじめは公演にたいする市民の反応は良くありませんでした。というのも、人びとが暮らしている場所で公演をすると、うるさいじゃないですか。騒音についてかなり心配をしましたが、住民の皆さんは、1,2回公演をご覧になると、「まあ、大丈夫だろう」と思われたようです。今は、僕らに、タダで食事をおごってくれたりもします。

入場料は無料です。代わりに「寄付制」はあって、公演を見て千ウォンでも2千ウォンでもいただければ、50%は僕らが受け取り、50%は社会に寄付します。(公演で得られる)僕らの会社の収入の半分は寄付金になります。

利益は出ません。出ませんが、僕らが生活できるていどのお金は集まります。市から支援

韓国の大衆音楽産業で働く人々のライフヒストリー

金が出て、それで活動をし、寄付金が集まり、それをもとに活動すれば、次の支援金が届きます。そのような方法で、資金繰りをしています。

公演をする傍ら、子どもたちに無料で楽器を教えています。これも才能寄付です。そうした活動をしなが、子どもが音楽活動にたいして拒否感を持たないようにしています。大人も教えていて、京畿道^{キョンギド}からいらっしゃる人も、江南側^{カンナム}からいらっしゃる人もいます。

僕らの教室については、麻浦区^{マポ}庁で広報をしてくれています。文化体験教室として、他の事業とともに僕らの楽器店も紹介されています。僕らがこういう試みをしていることを聞いて、放送局や新聞社からたくさん連絡が来ます。

僕らは、もう市庁とコンタクトする考えはまったく無いんです。僕らだけで、公演会場と練習室とスタジオのようなものを準備してみようと話しています。町内会からもOKが出て、実現しそうです。僕らが地域住民と交流してきたからでしょう。

——公演の無料公開で市民の耳を高めるとか、無料で子どもむけ音楽教室をするとか、常に一般市民との関わりの中で活動をされていますね。

Hyun-soo: ええ、僕らは人との関わりを考えながら活動しています。僕らは、常に人々のために音楽をするつもりです。何の考えもなく公演をしても、観客に何も伝えられません。人々のために演奏する役割である以上、ふだんの活動でも人びととの関わりを意識しないといけないと思っています。

才能寄付はおもしろいですよ。どこに行こうとも、公演できる人になりたいです。どこでも、人びとのための音楽ができる、そんな人になりたいです。

こんなことがあります。学生や大人が公演を見に来たり、(自分自身が)他の人が演奏するのを見るじゃないですか。そうした様子を見るたびに思うのは、「人がものを伝えようとする時、言葉で伝えるのと、音楽で伝えるのとでは、だいぶ違うんだな」ということです。ただ話すよりも、音楽をつうじて伝えられることのほうが多いと感じます。そんなことを常に考えています。僕らの音楽を、余すところなく確実に聞き手に伝えられるようにしたいです。

ミュージシャンたちは、(社会から)ちょっと下に見られて、良い大学に入っても、知られていない人が多いです。そんな状況にたいして、音楽に関心を持ってほしいと語るよりは、僕らが人に伝わる音楽を演奏するべきでしょう。それで、僕らの音楽に耳を傾けてくれる人々がいたら嬉しいです。

IV. 現時点で得られる示唆

最後に、今回のインタビューから得られた示唆を断片的に示しておく。第一に、「国益」を意識して個人が音楽活動しているかという疑問点については、予想どおり、そうした事実

を確認することはできなかった。インタビューからは、「世界における韓国のイメージを向上させるために音楽活動をしている」とか「韓国経済の発展に貢献したい」といったセリフを聞くことはなかった。音楽公演の無料公開をつうじて、人びとの音楽センスを高め、「韓国全体の音楽的な水準が高まる」ことを期待する発言はあった。しかし、これを「国益」向上への意思として解釈するのは不適切であろう。

むしろ、日本での活動のなかで、自国にたいする誇りを抑制する経験をインタビューは強いられている。韓国人を差別する日本人プロデューサーに、「お前、竹島はどここの国の島なんだ？」と問われたものの、プロデューサーとの関係に配慮し、彼は何も答えない選択をした。

第二に、K-POP ブーム前の2008年の音楽業界における、韓国と日本の「文化交流」の一端が明らかになった。一言でいえば、それはとても「いいかげん」なものだった。少なくとも次の3点の事実がある。

1) アーティストと派遣元である韓国のX社との間に連絡がなかったこと。最初は韓国のX社からヒョンス氏に連絡はあったものの、途中で連絡が途絶えた。また、韓日プロジェクトそのものが終了したことも知らされなかった。X社は大手の企業だが、「一流企業公認のプロジェクトによる派遣」というイメージからはかけ離れた実態が展開していたといえる。

2) ヒョンス氏の受け入れ先企業である日本のZ社の最初の担当者が、韓国人を差別する人物であったこと。文化交流の担当者が、差別主義者であるというのは驚くべきことである。「文化交流」事業はどうあるべきか、Z社内できちんと議論されていなかったことが推察される。

3) 「韓国から来たミュージシャンを紹介する」という、日本のZ社作成の番組の内容が、羊頭狗肉だったこと。韓国人ミュージシャン本人よりも、一緒に仕事をしている日本人に多くインタビューしていた。インタビューじしんが指摘するとおり、それは「日本人が見た韓国人の紹介」であり、「韓国人の紹介」ではない。「文化交流」と名づけられる事業が陥りがちな一面を表していると思われる。

この「いいかげんさ」はK-POP ブーム前だったゆえに生じたものなのだろうか。あるいは、ブーム以後は改善されたのだろうか。韓国、日本の企業体の両方について検討していく必要があるだろう。

第三の示唆は、ヒョンス氏の個人史に、日韓の音楽交流史を見出すことができるということだ。ヒョンス氏が2000年代はじめにギターを本格的に開始したのは、X-JAPANの影響だった。2000年は、韓国における日本文化の解放が第三次まで進んだ年である。前年には岩井俊二監督の日本映画『ラブレター』が韓国で公開され、140万人を動員している。2000年代はじめは、「日本文化の解禁」を肌身で感じられる状況であった。そうした歴史的状況を背景として日本のロックバンドの影響を受けた青年がギターを学び、のちに韓国から日本に派

韓国の大衆音楽産業で働く人々のライフストーリー

遣されるのは、日韓の音楽交流史を象徴する出来事といえる。

第四に、韓国の兵役制度が青年のキャリアにもたらす悪影響である。軍隊では満足にギターの練習ができず、除隊後は、ヒョンス氏の演奏技術は初心者レベルにまで落ちてしまった。そして、音楽大学の授業についていけないように、1年休んで練習しなければならなかった。兵役のせいで、貴重な青年期の数年間が無駄になる。兵役によるキャリアの断絶については、音楽人のみならず、俳優やスポーツ選手についても指摘されていることである。今回の事例からも同様のことが確認された。

以上、K-POP ブーム前に、日本に渡った韓国人ギタリスト青年のライフストーリーから得られる示唆を列挙した。今後は、さらに多くの関係者に話を聞きながら、「問い」を精緻化し、分析を行いたい。

参 考 文 献

- Kinmonth, Earl H., 1981, *The Self-Made Man in Meiji Japanese Thought: from Samurai to Salary Man*, University of California Press: California. = E.H. キンモンズ, 1995, 広田照幸ほか訳『立身出世の社会史——サムライからサラリーマンへ』玉川大学出版部
- Nye, Joseph Jr., 2004, *Soft Power: The Means to Success in World Politics*, Public Affairs: New York.
- Nye, Joseph Jr., 2011, *The Future of Power*, Public Affairs: New York.

(本稿は、2012・13年度、東京経済大学「国外研究員」としての研究成果の一部である)